

誰も置き去りにしない、
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために



未来 Watch

みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティ

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

ホームページで「講演動画」公開中!

ニッケ教育研究所 ビデオギャラリー

教師の皆さまへ 模擬授業形式の特別講演

「教師の日常改革」

〈講師〉関西学院初等部 教諭 森川 正樹 先生

授業が変われば
学びが変わる!
子どもが変わる!

スマホから、ご視聴いただけます

「授業で勝負する」ためのヒントは、
子どもたちとの何気ないやりとりの中にある——
気づきを実践につなげられるお話です。ぜひ、ご覧ください!

動画の
ご視聴は
こちらから



一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びする環境づくり」に参加していただけますか?
子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

世の中は「仕組み」で動いています。そして、私たちは無意識のうちに「当たり前」のこととして考えています。例えば、ファミリーレストランに入ると、スタッフの方に席に案内され、水とおしぼりが出てきて、注文する、というような一連の流れです。これは、お店とお客の間に暗黙的に了解されている「仕組み」です。しかし、この「仕組み」は、新しい技術と人手不足を背景として大きく変化してきています。セルフオーダー、ロボット配膳、セルフレジなどです。慣れない間はサービスが低下したような感覚を持ちますが、慣れてしまえば全く問題ないし、その方が気楽だったりします。多様化と技術の進化の中で、子どもたちがより伸び伸びと自分らしく成長できる新たな「仕組み」を、様々な取組・行動により作り上げていく時期が来たように感じています。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長 楠本 景央



FOLLOW US!



2025 冬号 (年4回発行) No.20
2025年1月20日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町3丁目3-10
TEL: 06-6205-6665 <https://nikke-edu.org/>

特集

未来につなぐ学校づくり 第5回

「校内適応指導教室」における コーディネーターの役割

～ 過去5年間の取組を通して ～

私がつくる子どもの笑顔 第16回

すっきやねん 滝川

～ 幼稚園・小学校9年間を見据えた保育・教育の連携 ～

誌上対談

子どもたちのために何ができるかを一緒に考える

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真は十勝平野の防雪林 (北海道) です



子どもたちは、やがてより広い社会との関わりを持っていくこととなります。その未来を輝かせるために、必要な力を身につけておくことが大切です。ここでは、中学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。

第5回は、大阪市立北稜中学校の山咲進一校長です。

第5回

「校内適応指導教室」における コーディネーターの役割 ～過去5年間の取組を通して～

《大阪市立北稜中学校》 やまさき しんいち 山咲 進一 校長

本校（大阪市北区）は、国の重要文化財である「泉布観」に隣接し、校区内には日本三大祭の「天神祭」で知られる大阪天満宮があるなど、文化と伝統を重んじる地域にあります。さらに、国道をはさんで「造幣局」があり、周辺には企業のビルや高層マンションが林立しています。社会の変革と進展に敏感なこの地域では、近年、生徒数が増加の一途をたどっています。それに伴い、多様化する生徒への対応が大きな課題となっており、2019年度から「困り感のある生徒への対応」に取り組んできました。その一例を紹介します。



学校教育目標

- 「優しさ溢れる学校をめざして」
- 豊かな人間性・確かな学力を養い、生きる力を育成する

めざす生徒像

自分に責任を持ち、他者を思いやる豊かな心を持つ生徒

校内適応指導教室『SSR』設置の経過

本校では、『SSR』（スペシャルサポートルーム）の取組を始めて6年目となります。現在、通常学級と特別支援学級の担当者が協力して支援することを基本としています。しかし、当初は「誰が支援するのか」という課題が浮き彫りになっていました。特別支援教育サポーター（以下、サポーター）などの協力は得ていたものの、教員からは時間的な負担を懸念する声もありました。また、利用する生徒一人ひとりの状況は異なるため、支援の仕方も様々です。教室からの配信授業で学習を進められる生徒もいれば、学習までは至らなくとも、まずは登校できることに重点を置く生徒もいました。さらに、教員が入れ替わり立ち替わり支援していましたが、そこにも課題はありました。実際、教員が交代するたびに何度も同様な

ことを聞かれたり、複数の教員がこの部屋にいたりすること自体が「とてもしんどい」と訴える生徒も出てきました。

これらの課題に直面していた頃、職員会議で「**教室をコーディネートできる人**がいれば運営が円滑にいくのではないか」という意見が出ました。利用する生徒一人ひとりの状況をコーディネーターが把握し、支援内容を見極めて調整し、必要な時に必要な支援を提供できれば、教員の負担軽減や生徒への柔軟な対応が可能になると考えました。これは、運営を改善する上での大きなヒントとなりました。



ある女子児童や、感覚過敏のために標準服を着用できないという相談が立て続けにありました。このような背景から、困り感のある子どもがどのようにすれば安心して学校に通えるかを第一に考える必要がありました。そして、校内の体制づくりや研修による教職員の共通理解、学習環境の整備に

『SSR』の必要性

2023年1月、あと数ヶ月で入学予定の子どもを連れて、保護者が校長室に相談に来ました。「娘が詰襟学生服で中学校へ通いたいと言っている」という内容で、両親ともに戸惑っている様子でした。児童本人にそのことを尋ねると、意思はかなり固いようでした。この頃、スカートに抵抗感が

努めてきました。まずは、『SSR』のような**居場所があることを生徒・保護者が知る**ことで、学校へ来ることの高い壁が、多少なりとも低く感じられるようになることをめざしました。学校が保護者や生徒との信頼関係を保つためにも、居場所づくりの推進は非常に重要な取組であると考えています。

『SSR』への登校を目標にしている生徒には、学校に必ず来なければならないというプレッシャーは与えず、教職員も

スモールステップを意識しながら生徒との関係づくりに重点を置いています。適切なタイミングで「学校にもこんな場所があるよ」と声をかけるぐらいがちょうど良いと思います。不登校数を減らすことに躍起になるのではなく、「生徒が安心する場所はどこなのか」「それはなぜなのか」「学校では何ができるのか」などを教職員で考えていくことが、『SSR』の環境整備につながると考えています。

コーディネーターの役割

コーディネーターの役割で最も重要なのは、『SSR』の必要性を**全教職員で共通理解する状況をつくる**ことです。これには、かなりの時間と労力がかかりますが、持続可能な取組となるよう、さまざまな工夫と改善を試みました。

2022年度、『SSR』のコーディネーターとして特別支援学級担当者を1名配置しました。しかし、兼務となったことで多忙な状況が続いてしまい、組織体制としての課題が残る結果となりました。一方で、コーディネーターの発案により、授業を受けたくても教室に入れない生徒のための「ステップルーム」を新設しました。本校では『SSR』のことを「リソースルーム」と呼び、まずは学校に来ることを目的とした居場所にしてありますが、「ステップルーム」は学習者用端末を使って配信授業を受ける場所です。そこでは、教室で授業を受けているという意識を生徒に持たせるため、教員の学習支援は行わないことを基本としており、その体制は現在も継続しています。

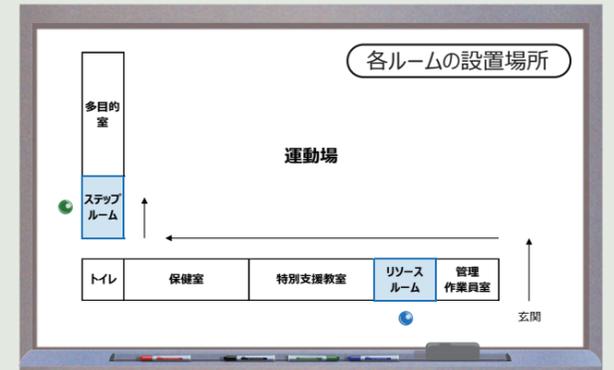


2024年度、大阪市総合教育センターの研究校となったことをきっかけに、加配教員を『SSR』のコーディネーターとし、さらに各学年2名の『SSR』担当者をおきました。同時に、生徒指導主事・サポーターをメンバーとする組織を立ち上げ、コーディネーターをその組織の長としました。また、2週間ごとのリソース・ステップ連絡調整会議や、毎月の職員会議で利用生徒の状況把握と必要な支援について情報共有を行うなど、**学校全体の取組としての意識向上**に努めています。

おわりに

取組当初、「こんなことをしていたら学校が荒れるじゃないですか」という声が教職員からありました。しかし私は、「不登校生徒がこれだけ増えているということは、もうすでに十分荒れています」と答えました。「勉強のことは気になるけど、どうして良いかわからない」「学校に行きたくても行けない」などの不安を持っている生徒が多くいるのです。

『SSR』運営で重要なことは、校則などを含めて「学校はこ



過去5年間で振り返った時、ハード面で重要だと感じる場合があります。それは、リソースルームやステップルームの設置場所です。本校の場合、玄関に入って左側に管理作業員室があり、その隣にリソースルーム、さらに隣接して特別支援教室、保健室、トイレがあります。そして、右に曲がってすぐのところステップルームがあります。玄関から近い所にリソースルームがあることで、他の生徒の目が気になりにくくなります。また、しんどくなった時や困った時の居場所（特別支援教室や保健室）やトイレが近くにあるため、学校に来づらい生徒が**安心して登校できるような配置**になっています。

うあらねばならない」という指導の枠に入り切れない生徒がいることを全教職員が認識することです。そして、今までの指導方針を見直して柔軟に対応していくこと、誰もが安心して登校できる学習環境を作りあげていくことです。さらに、子どもたちに劇的な変化を求めるのではなく、卒業後に改善が見られても良いというくらいの感覚、即ち、スモールステップを心がけることが必要であると感じています。

私がこくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざし、現場ではさまざまな創意工夫が活かされています。ここでは、小学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第16回は、大阪市立滝川小学校・滝川幼稚園の村上昌志校長です。

第16回

すっきゃねん 滝川 ～幼稚園・小学校9年間を見据えた保育・教育の連携～

むらかみ まさし
《大阪市立滝川小学校・滝川幼稚園》 村上昌志 校長

滝川小学校（大阪市北区）は明治5（1872）年8月8日に北大組4区小学校として開校し、昨年、創立152年目を迎えました。本校周辺は、当時から大坂三郷・天満組という歴史を背負いつつ、造幣局が創設されるなど、大阪の文明開化をけん引し続けてきた地域です。今では、OAP（大阪アメニティパーク）をはじめ高層ビルが立ち並ぶ傍らに、歴史的建造物である「泉布観」や「旧桜宮公会堂」が大切に残されています。幼稚園、小学校とも校舎は新しくなりましたが、造幣局との境界に残されたレンガ塀が往時をしのばせています。「温故知新」を体現すべく、子ども・教職員・保護者に加え、地域の皆さまとの結びつきを大事にしてきた伝統が今も息づいています。現在、児童数は366名、園児数は69名と中規模校ですが、都心回帰により毎年微増しています。



本校の大きな特色は、敷地内に小学校と幼稚園が併設されており、校長が園長を兼務していることです。校舎と園舎は仕切られており、教育課程も異なりますが、子どもも教職員も互いの存在が当たり前と感じています。この併設の良さを生かし、年間を通して「スマイルタイム」と名付けた交流活動に取り組んでいます。幼稚園では豊かな関わりの中で生き生きと表現する力、小学校ではICT次世代モデル校の実践を通じたICT活用力や伝え合う力など、未来を切り拓く力の育成に注力しています。

学校教育目標

一人一人が大切にされる教育の創造

小学校・・・**た** 確かな学力 **き** 気持ちの優しさ **が** ガッツな心と体 **わ** わかろうとする意欲
幼稚園・・・**た** たすけあう **き** きたえる **が** かんがえる **わ** わになる

めざす子ども像

- できるようになりたいと強く願い、チャレンジする子ども
- 思いやりをもち、自分のためみんなのために行動できる子ども
- 自分の心と体を知り、よりよくなるために行動できる子ども

豊かな表現力の基礎を培う【幼稚園】

👉 クラスの垣根を越えた新たな保育へのチャレンジ

幼稚園のクラス担任はすべて経験の浅い若手教員で、日々奮闘しています。特に新任教員は覚えることも多く、毎日の保育をこなすことに追われています。次第に子どもの思いに寄り添えない状況に、落ち込むことが増えてきました。そのような中、他園の先生方に参観していただく「研究保育」の話があり、不安がよぎったものの、引き受けることにしました。主任とも相談して6月に行くことを決断し、クラスの垣根を越えた新たな取組にチャレンジする**若手教員をベテランがサポートする体制**を整えました。参観当日、市内各地から来られた先生方からは、「どの子どもも自分の思いのままに、一心に活動している」「5歳児が4、3歳児の子どもたちにやさしく教えている」

などの評価をいただき、教職員一同、大きな達成感を味わうことができました。



未来を切り拓く ICT 活用力の育成【小学校】

■ GIGAスクールの具現～端末使用の日常化～

今年度で6年目となるGIGAスクールの研究推進に向けて、四天王寺大学の木原俊行先生、和歌山大学の豊田充崇先生、兵庫教育大学の永田智子先生をお招きしました。新たなテーマを『「学びの調整」ができる子どもの育成』とし、日々研究に取り組んでいます。一人一台の学習端末を活用し、調べたことや意見の共有にとどまらず、比較、分析、表現、発信する場面を設定して学びを深めるとともに、次の



学習に生かすことを目指しています。学校独自の「情報スキルチェック表」を作成し、子ども一人一人が獲得すべきICTスキルを明確にし、**毎日の授業を通して情報活用能力を高める**ようにしています。現在は、共有した学習成果を価値づけるためにプログラミングを取り入れることを模索しています。このような取組により、教育委員会が目標に掲げる学習端末使用率80%超えも目前に迫っています。



幼・小の子どもを結ぶ「スマイルタイム」

併設校園の強みは、幼稚園と小学校の子どもたちが日常的に交流できることです。隔週木曜日の15分休憩を「スマイルタイム」として、小学生と園児と一緒に遊びます。砂場でトンネルを掘ったり、サーキット遊びでコースを工夫したりと、没頭する子どもも出てきます。**遊びを通して自然なコミュニケーション**が生まれ、考えを出し合う中でどんどん距離を縮めていきます。名前を覚えるまでには至りませんが、しっかり打ち解けることができている。また、全年齢・全学年が意図的に交流する「スマイルタイムDX」にも取り組んでいます。「邸宅跡公園で遊ぼう」「小学校のプールに入ろう」「おもちゃで遊ぼう」

などのプログラムを通じて、園児は小学生や小学校に憧れを持ちます。小学生は園児からのお礼の手紙や絵をもらい、準備したことが報われて大きな喜びを味わうことができる取組となっています。



地域のおとなと子どもを結ぶ「すっきゃねん 滝川」

「すっきゃねん 滝川」は、滝川地域社会福祉協議会が核となり、連合町会、女性会、子ども会、PTAや各種団体が力を合わせて運営する地域の夏祭りです。大人に混じって小学生も「輪投げ」の店を出し、幼稚園や保育園の子どもたちを楽しませます。自分たちでお店を考え、他の学年の友だちに楽しんでもらう取組は学校にもありますが、この日は「もっと楽しんでもらいたい」「いっぱい遊んでほしい」という気持ちがより強く湧いてきます。保護者の方々のサポートあつての運営ですが、子どもたちの呼び込みの声や、誘導する姿に本気が伝わってきます。お店が終わるとキリッとした浴衣姿の女性会の方が櫓を囲み、盆踊りの幕があがります。「滝川音頭」に合わせて、皆が輪になって踊

り始めます。**世代を超えた一体感**こそ、「すっきゃねん 滝川」の醍醐味です。この時空を共有することで、子どもたちもより深く地域への愛着を持つことができると感じます。



おわりに

「夢なき者に成功なし」—— 明治維新に大きな影響を与えた吉田松陰の言葉です。新しい時代を切り拓く子どもたちが可能性を広げ、自分らしい夢を持てるような学校園にしていきたいと、私たちは実践を重ねています。

子どもたちの豊かな学びの原動力は「本物との出会い」です。その機会を数多く持つよう、地域や保護者の皆さまには、引き続きご支援をお願いいたします。

多彩な経歴を持つ区長が語る、未来を創る教育活動

子どもたちのために
何ができるかを
一緒に考える

《ニッケ教育研究所顧問》

元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）かつもと たかお
勝本 孝夫 氏

《大阪市東成区長》

《大阪市教育委員会
第2教育ブロック代表》みくり かずのり
御栗 一智 氏

多様な人からさまざまな経験知を学ぶことで、私たちは視野を広げ、より豊かな生き方を見つけれられるのではないのでしょうか。今回、銀行や企業でのお仕事を経て小学校の校長を務め、2021年4月からは大阪市東成区の区長としてご活躍されている御栗一智氏と、ニッケ教育研究所の勝本孝夫顧問による誌上対談を行いました。（聞き手：ニッケ教育研究所 橋本立志）

——東成区長であり、東成区担当教育次長・第2教育ブロック代表というお立場でもあります

御栗区長 大阪市は分権型教育行政を採用しており、4つの教育ブロックがあります。私はそのうちの第2教育ブロックの代表を務めています。このブロックでは、重点的な取組の1つとして「キャリア教育」をテーマに掲げ、現在2年目です。私は民間企業出身の公募校長でしたので、特にお役に立てるのではないかと考えています。学校長の時に、自分でも「日本を支えるものづくりについて」授業を行いました。ブロック内の研究授業にも極力参加しています。

——銀行員になる前に、教員免許を取得されていますね

御栗区長 もともと教員志望で教育大学に行くつもりでしたが、高校で進路指導を受け、経済学部で教員免許を取ることになりました。教育実習は母校の中学に行きましたが、子どもたちと接して「やっぱ、先生ええなあ」とあらためて感じました。しかし、現場の先生がすごく頑張って授業している姿を見て、教員試験を受けるのは失礼だと思いました。大学ではバレーボールばかりしていて、教職の勉強をあまりしていませんでした。ゼミが金融論だったこともあり、金融関係の会社からのお誘いも多く、教員免許を取得した上で、結果的に銀行員になりました。

勝本顧問 学校では金融経済教育が義務化されました。子どもたちの自立する力や社会と関わる力を育てることで、将来豊かに暮らすための態度が身につくと期待されています。銀行でのご経験が、キャリア教育とも結びついてきますね。

——民間公募で小学校長になられたきっかけは？

御栗区長 銀行に入り、製造業や生保への出向を経験後、コンサルティング会社に転職しました。お客様から相談を受けて

解決手段を提供する担当でしたが、プロのコンサルタントと一緒に働けたのは大きなプラスでしたね。ただ、営業の仕事は半年ごとと同じことの繰り返しで「もう、ええかな」と思って辞めようとしていた時、大阪市が校長先生を募集しているらしいと。元々、教員志望だったので、一次試験を受けました。でも、筆記試験の会場で一生懸命頑張っている教頭先生がたくさんおられる中で、「僕みたいなのが・・・」という気持ちになったのです。論文の最後に、「大変失礼しました。もう一度、勉強して受けにきます」って書いたら、やっぱり不合格でした。その後、知り合いの小学校の校長先生にいろいろ教えていただき、翌年、合格することができました。

勝本顧問 その後、研修の一環として学校現場に行かれたと思います。かつて私が小学校長をしていた時にも、2名の公募校長が実習に来られました。民間企業での経験が活かされていて、とても良い印象を受けました。

——銀行や企業で要職を経験されていますが、その経験知から教育現場に役立ったことは？

御栗区長 九条東小学校（大阪市西区）で校長を務めた時、**学校運営方針**（経営ビジョン）を毎年作って教職員と共有していました。学校経営目標、めざす子ども像、めざす学校像、今年度の具体的な取組、行動指針を示していますが、こういうものは銀行員の頃も作っていました。あと、**SWOT**（自社の内部環境と外部環境を4つの視点から分析するもの）の学校版を作っていました。強み／弱み、機会／脅威を整理して、**足元の課題を明確にするため**です。テーマ毎にどれだけ深く、現状把握と分析ができるかがポイントです。現在、区役所版も毎年、更新しています。また、銀行員の経験から「**つながる**」ことを心掛けました。学校の中では先生方がすごく頑張っていたので、校長の仕事は外部とつな

がることだと思います。着任して1学期中に、地域の方を中心に400枚ぐらい名刺を配りましたよ。ただ、私がいなくなったら続けられないことはしてはいけないと考えていたので、地域資源だけと思って動きました。もう、つながりまくって、どんな人がいて、何をやらせようかというのを探していきました。一例を挙げると、ありがたいことに、オリックスパファローズと大阪ドームが校区内にあり、出前授業を毎年、お願いしました。「球場から見えるでしょ、あの学校です！」「必ずやらせてもらいます。空いている日をいつでも言ってください」と訪問もしました。諦めずに何度もアプローチすることが大切です。2年連続で来ていただきました（3年目はコロナ禍で中止）。実は、自分がファンということもありますが、地元だし、私がいなくなってもパファローズは校区内にあるので。

勝本顧問 熱意を持って何度も足を運ぶなど、人間味のある関わり方は大事ですね。そういったつながりがあれば続きますから。また、学校運営方針をしっかりと共有していたのが素晴らしいですね。目ざしていることを頭に描きながら行動すると、現実のところまで精一杯になってしまうのでは大違いですから。

——実際の教育現場で、カルチャーショックはありましたか？

御栗区長 いろいろありました。人事権を持たずにリーダーシップを発揮するのは難問でした。極端な例ですが、銀行では支店長の方針に合わなければ異動になるのが普通でした。それから、学校事務ですね。銀行窓口で現金を持って行く、保有口座の数が多すぎる、一枚一枚伝票を書く、印鑑を押す、そんな世界が未だに残っていることに驚きました。ほかにも、自動音声での電話応答がなかったことなどです。ところが一昨年、区内のある中学校が自動音声案内をやり始めたのです。1年生のご用の方は1番、2年生は2番、で、事務室は5番とか。東成区の教育会議において「無茶苦茶いいです」「電話かけたら、すぐに先生が取ってくれる」と保護者代表にも好評でした。その後、教育長との意見交換会で導入成果を紹介し、「効率化、働き方改革になるからやって欲しい」と申し上げました。100件あった電話の取り次ぎ事務が20件になるのですから。そうしたら、教育委員会事務局がアンケートをかけてくれて、大半の学校が導入効果について肯定的な回答をしてくれており、設置していく方向で準備が進んでいます。

勝本顧問 学校現場は時代に追いついていないところがあって、事務の改善が必要というのは全くその通りです。教職員も、楽になればその分、**子どもたちのために時間を割けるようになります**。

御栗区長 あとは、職員トイレにショックを受けました。でも、動めてすぐにわかったことがあります。先生たちは自然体で自分たちのことを後回しにしているのです。要は、子どもたちのトイレがまだこの状態なのに、「職員トイレを新しくしてほしい」とは絶対に言わないですよ。でも、個人的に「これだけ先生が現場で頑張っているのに、なんとかならないものか」と思っています。学校全体のトイレが良くなっていきますので、大いに期待しています。

——中学生のリーダーを集めた「ひがしなり未来会議」がスタートしました

御栗区長 きっかけは、2024年元日に発生した能登半島地震です。区内の中学校4校全てで自主的に子どもたちが募

金活動をして、私に届けてくれました。かねてより、中学生のパワー、行動力はすごいと感じていたのも、彼らの意見を区政に取り入れ、彼ら自身がやりたいと思えるように反映したいと考えていました。校長先生方に相談し、中学校毎に地域課題やまちづくりについて生徒の意見をまとめ、4中学校の代表が集まる場で発表する「**ひがしなり未来会議**」をスタートしました。区長をはじめ、消防署長、地域連合の防災担当、区のPTA協議会会長が出席して防災をテーマに提言を受けましたが、良い提言や問題提起、気づきがたくさんありました。今後、彼らの思いを反映させた新施策や改善策を具体化していきます。これはキャリア教育の一環であり、**PBL（プロジェクトベースドラーニング）**の一例です。地域の課題を子どもたちが提案し、解決するという学習になります。

勝本顧問 課題学習、課題解決学習の必要性は、教育現場で強く叫ばれています。行政が中心となり、学校や地域を巻き込んで課題解決に取り組むことは、とても斬新で意味のある試みですね。

——最後に、教育現場の皆さまに伝えたいことをお聞かせください

御栗区長 大阪市は、区長が区担当教育次長を兼ねています。区長をはじめ区役所は、区の方針に照らして先生方のご意見を極力反映できるように一生懸命に考え、動きますので、ぜひ、意見交換していただければと思います。そこにお応えていくのが私たちの仕事ですし、教育委員会とは違った観点から区の独自施策を展開し、いろんな連携ができますので。また、大阪市教育委員会には、学校現場のみなさんから直接受けた意見、質問、要望にしっかりと回答する仕組みがあります。すごく良いものになってきていますし、みんなが「子どもたちのために」と思って頑張っています。お互いに意思疎通を図り、良いかたちで課題解決していければと思います。

勝本顧問 現場から出てきた声を、一人一人の教職員に返しているのは良いですね。一方で、心理士やスクールロイヤーなどプロフェッショナルの力も必要だと感じます。トラブルやアクシデントが起こると、現場はそのことで精いっぱいになってしまいますので。

御栗区長 私がいた銀行は、国内だけで650～660の支店がありました。各地で同様の事案がいついっしょ起きているわけですが、法務室に電話するとすぐ答えてくれるのです。「あ、それは、東京で起こっていた案件と一緒にです。考え方、根拠はこうですから、こうしてください」と。だから、担当する専門窓口や弁護士の先生に簡単に電話相談できる体制を整えたら、学校現場はもっと楽になると思いますし、自信を持って対応できます。ただ、民間企業と違って、先生は全部受けないといけないので大変です。「うちでは無理ですから、他社に行ってください」とか、そんなふうにはいかないじゃないですか。だからこそ、こういった仕組みが必要ではないかと思えます。これからぜひ良い意見を出していただき、**子どもたちのために何ができるかを一緒に考えていきたい**と思います。区長が先頭に立って動きますし、大阪市は総合教育センターも充実していてバックアップ体制も整っていますので。

本日は、貴重なお話をお聞かせいただき、大変ありがとうございました。